琉球大学学術リポジトリ

小学生版家族満足度尺度の作成

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
	公開日: 2021-12-07
	キーワード (Ja): 小学生, 家族満足度尺度
	キーワード (En):
	作成者: 平田, 幹夫, 比嘉, 紀枝, Hirata, Mikio, Higa, Norie
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/30403

小学生版家族満足度尺度の作成

平田 幹夫 *　比嘉紀枝 **

The Scale of Family Satisfaction for Elementary School Students

Mikio HIRATA* and Norie HIGA**

本研究では，児童の家族満足度尺度を作成し，信頼性と妥当性を検討することを目的とした。小学生3年生から6年生までの351名を対象に，家族満足度尺度を実施した。因子分析の結果，解釈可能な4因子24項目が抽出され，「家族満足感」，「家族共通行動」，「家族に関する自己開示」，「家族からの受容感」と解釈可能であった。本尺度の内的整合性を調べるために，Cronbachのα係数を算出した結果，α = .88 ～ .76であった。この結果から，「家族満足度尺度」の4つの下位尺度には内的整合性があることが確認された。また，「家族満足度得点」とフェイスシートの「家族仲良度」及び「家族満足度」の間に有意な中程度の正の相関が見られた。その結果，「家族満足度尺度」の妥当性がある程度確認された。これらの結果をもとに，24項目からなる家族満足度尺度を作成した。

キーワード：小学生、家族満足度尺度

背景と目的

子どもは，家族の愛情の中で養育され家族と共に成長していく。青年期までの成長過程において，家族との関係はきわめて密接である。また，子どもは親や養育者との関係を基盤に対人関係を広げていく。しかし，近年，生活環境はめまぐるしく変化し，その変化と共に様々な問題が家族の中で起こっている。不登校や児童虐待，対人関係の希薄化，凶悪化する少年犯罪などは，子どもだけの問題でなく，家族全体を理解する必要がある(江幡・吉田, 2000)。国民生活白書(内閣府，2007)によると，家族の存在を何よりも大切だと思う人は増加傾向にある一方で，家族が個別に行動する時間や機会が多くなり，そのつながりは弱まっている。家族に起因する問題を解決するためには，子どもの発達に応じた適切な家族機能や家族満足度を高める取り組みが必要になってくる。

これまでも多くの研究において，子どもに及ぼす家族の影響力について関心を払ってきたが，そのほとんどが親，特に母親の子どもへの影響力に焦点を当てたものであり，家族全体やそのシステムに関心を払ったものではない(前原・金

* 琉球大学教育学部
** 沖縄国際大学キャンパス相談室

城，2001)。佐々木(1996)は，近年，家族システムの視点に立った研究が始まりつつあると述べている。

それでは，家族を含めた子ども理解には，どのような方法があるのだろうか。家族内の人間関係の診断方法は，面接，観察，質問紙が主であるが，子どもとその家族内の人間関係を調べる際には，家族という個人的な情報は他人に知られたくないという気持ちや，よく見せたいという歪みが生じやすいことを考慮しなければならない。

家族機能を測る質問紙で，よく利用されているものにOlson，Splenkle & Russell(1979)のFACES (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale)がある(西出，1993)。草田・岡堂(1993)は，Olsonがその後改良を重ね，作成した第3版のFACES㈣を和訳して「家族機能測定尺度」を作成した。この尺度は，家族メンバーが互いにもつ情緒的なつながりを示す「凝集性」，家族に状況的危機や発達的危機があった場合に，家族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力である「適応性」，「凝集性」と「適応性」の2つの次元がうまく機能するように促進的な働きを持つ「コミュニケーション」の3つの次元から構成されている。「家族機能測定尺度」は，対象が専門学校生や大学生であることから，児童に使用する尺度としては，質問内容が抽象的でわかりにくいため，そのまま使用することはできない。

前原・金城(2001)は，小学生・中学生の家族機能を測るために家族環境尺度を作成し，「情緒的結合」，「価値・規範」，「遊離」，「社交」の4因子を抽出した。そして，家族環境尺度の構成的妥当性を吟味するために，9項目からなる「家族満足度」を作成し（表1），すべての項目の総得点を家族満足度得点とした。家族満足度得点と各項目得点との相関係数は，.75～.44であったので，家族環境の4因子を説明変数とし重回帰分析を行った。その結果，校種の違いにかかわらず「情緒的結合」が家族満足度得点と有意に高い正の相関を示すことが示唆された。しかし，「家族満足度」の項目数が9項目と少なく，信頼性や妥当性の検討も十分に行われていなかった。

そこで，本研究では，草田・岡堂(1993)と前原・金城(2001)を参考に，小学生を対象にした新たな家族満足度尺度を作成し，その信頼性と妥当性を検討することと，家族満足度に性差や学年差があるかどうかの検討を行った。

表1　家族満足度

私は自分の家族が大好きである
私は自分の家族を誇りに思っている
(-)自分がよその子どもだったらいいと思う
私は、自分の家族にとても満足している
(-)私はときどき、自分の家に帰りたくないと思う
私は大人になったら今のような家族をつくりたい
(-)私は、他の人に自分の家族のことを知られたくないと思う
(-)私には、家族のことで悩んでいることがある
私は、家族と一緒にいると、とても気持ちが落ち着く

(-)逆転項目

方　法

調査対象：O県の公立A小学校に在籍する3年生（76名），4年生（115名），5年生（66名），6年生（75名）の計351名(男子168名，女子183名)が対象であった。なお，分析の際には，記入漏れや記入ミスのある回答を除いたものを用いた。

調査時期：調査は，平成20年7月から10月の間で実施した。

質問紙の内容：草田・岡堂(1993)の「家族機能測定尺度」と前原・金城(2001)の家族満足度9項目を参考に，小学生を対象にした新たな家族満足度尺度を作成した。

家族満足度尺度は，全25項目から構成され，すべて「まったく～ない」(1点)から「とても～である」(4点)までの4件法で作成された。

信頼性の検討は，家族満足度質問紙を実施後，因子分析を行い，各因子に対してクロンバックのα係数を算出することとした。

妥当性検討のために，「家族の仲良度」を測定する1項目と「家族に対する満足度」を測定する1項目を設定した。家族満足度尺度得点が高ければ，「家族の仲良し度」と「家族に対する満足度」も高くなると考えられる。そこで，家族満足度尺度の妥当性検討のための「家族の仲良度」と「家族に対する満足度」は，どちらも「まったく～ない」(1点)から「とても～である」(9点)までの9件法で回答させた。

手続き

フェースシートでは，学年・組，氏名，性別及び家族仲良度(9件法)，家族満足度(9件法)についての回答を求めた。家族満足度尺度は全25項目で，全て4件法で回答させた。調査結果をフィードバックすることを伝え，了解が得られたクラスのみ，担任による集団一斉実施を行った。調査の際には担任が各質問項目読み上げ，児童が回答を行った。

結　果

家族満足度尺度の分析

被験者351名のうち，19名の欠損データを削除し，分析可能な332名(男子159名，女子173名)の回答をもとに分析を行った(平均80.81，SD 12.91)。学年別・男女別度数内訳及び平均値や標準偏差は，表2のとおりであった。

表2　学年別・男女別度数内訳及び平均値・標準偏差

	性別				
	男	女	合計	平均値	標準偏差
3年生	33	43	76	84.87	12.74
4年生	63	52	115	81.93	12.40
5年生	28	38	66	81.20	11.21
6年生	35	40	75	74.64	13.27
合計	159	173	332	80.81	12.91

次に家族満足度尺度の全25項目に対して因子分析(主因子法，プロマックス回転)を行った。その結果，固有値1以上の因子が4つ認められた。さらに因子負荷量.40以下の1項目（18）を削除して再度因子分析を行った。その結果，解釈可能な4因子24項目が抽出された(表3)。

第1因子に含まれていた7項目は，「私は，今の家族の子どもでよかった」(.78)，「私は大人になったら今のような家族をつくりたい」(.75)などの項目から構成されており，現在の家族に対する満足度の内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「家族満足感」因子と命名した。

第2因子に含まれていた8項目は，「私は家族と一緒にでかけることが楽しい」(.80)，「私の家族は，みんなで一緒に何かをすることが好き」(.70)などの項目から構成されており，家族みんなで一緒に何かをやるという内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで，「家族共通行動」因子と命名した。

第3因子に含まれていた5項目は，「私は，他の人に自分の家族のことを話したい」(.61)，「私は，家族に思っていることを言える」(.55)などの項目から構成されており，家族に関する開示という内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで，「家族に関する自己開示」因子と命名した。

第4因子に含まれていた4項目は「私は，家族のことで悩んでいない」(.62)や「私の家族は，私の話を聞いてくれる」(.55)などの項目から構成されており，家族からの受容に関する内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで，「家族からの受容感」因子と命名した。

因子分析により抽出された24項目を家族満足度尺度とし，その合計得点を家族満足度尺度得点とした。

尺度の信頼性

「家族満足度尺度」の内的整合性を検討するため，「家族満足度尺度」のそれぞれの下位尺度について，Cronbachのα係数を求めた。その結果，第1因子「家族満足感」でα = .88，第2因子「家族共通行動」でα = .88，第3因子「家族に関する自己開示」でα = .76，第4因子「家族からの

受容感」で α = .76 であった(表3)。この結果から，「家族満足度尺度」の４つの下位尺度には内的整合性があることが確認された。

表3 家族満足度質問紙の因子分析結果(主因子法、プロマックス回転) N=332

項目内容	F1	F2	F3	F4	共通性
家族満足感:7項目(α=.88)					
3 私は、今家族の子どもでよかったと･･･思う	.78	-.10	.06	.09	.63
6 私は大人になったら、今のような家族を作りたいと･･･思	.75	-.09	.11	.03	.59
1 私は、自分の家族が･･･好き	.62	.19	.10	-.11	.59
4 私は、自分の家族に･･･満足している	.58	.19	.00	.03	.57
10 私は、家族から大事にされていると･･･思う	.58	-.06	-.01	.39	.60
5 私は、自分の家に帰りたくないと･･･思わない	.46	-.02	-.06	.26	.36
9 私は、家族と一緒にいると、気持ちが･･･落ち着く	.45	.29	-.16	.14	.51
家族共通行動:8項目(α=.88)					
14 私は、家族と出かけることは･･･楽しい	.03	.80	.03	-.08	.62
19 私の家族は、みんなで一緒に何かをすることが･･･好き	-.08	.70	.07	.05	.53
15 私は、家族と一緒に食事をすることが･･･楽しい	.12	.61	.03	.05	.58
13 私は、家族路一緒にテレビを見ることが･･･楽しい	.19	.57	.19	.15	.53
21 私の家族は休みの日に一緒に出かけることが･･･ある	-.05	.56	,10	-.04	.32
20 友達といすよりも家族でいるほうが･･･落ち着く	.35	.43	.05	-.02	.55
22 私の家族は何かを決めるとき相談することが･･･ある	.06	.42	.27	.14	.50
23 私の家族はまとまっていると･･･思う	.12	.41	.81	.19	.45
家族に関する自己開示:5項目(α=.76)					
7 私は、他の人に、自分の家族のことを･･･話したい	.23	.10	.61	-.20	.54
12 私は、家族に思っていることを･･･言える	.13	.14	.55	.47	.54
16 私は、家族に学校であったことを･･･話す	.07	.05	.53	.06	.41
2 私は、自分の家族を･･･自慢できる	.42	.06	.51	-.12	.51
17 私は、悩みを家族に相談することが･･･ある	.10	.09	.51	.03	.28
家族からの受容感:4項目(α=.76)					
8 私は、家族のことで･･･悩んでいない	.22	.03	.19	.62	.43
25 私の家族は、私の話を･･･聞いてくれる	.00	.12	.13	.55	.50
11 私は、オアからほめられることが･･･ある	.00	.05	.28	.64	.47
24 私にうれしいことがあったときに、家族は･･･喜ぶ	.02	.28	.08	.46	.50
因子間相関 F1:家族満足感	-	.74	.55	.57	
F2:家族共通行動		-	.59	.66	
F3:家族に関する自己開示			-	.50	
F4:家族からの受容感					-

因子間相関

因子間相関係数は，「家族満足感」と「家族共通行動」は r = .74，「家族満足感」と「家族時関する自己開示」は r = .55，「家族満足感」と「家族からの受容感」は r = .57，「家族共通行動」と「家族に関する自己開示」は r = .59，「家族共通行動」と「家族からの受容感」は r = .66，「家族に関する自己開示」と「家族からの受容感」は r = .50 となり，中程度から高い正の相関がみられた(表3)。

つまり，「今の家族の子どもでよかった」などの家族に対して満足感を持っている児童は，「私は家族と出かけることは楽しい」などの家族で行動を共にしたり，「私は他の人に家族のことを話したい」などの家族に関する自己開示をしたり，「私の家族は，私の話を聞いてくれる」などの家族から受容されている傾向にあると考えられる。また，「私は家族と出かけることは楽しい」などの家族

で行動を共にしている児童は，「私は他の人に家族のことを話したい」などの家族に関する自己開示をしたり，「私の家族は，私の話を聞いてくれる」などの家族から受容されている傾向にある。さらに，「私は他の人に家族のことを話したい」などの家族に関する自己開示ができる児童は，「私の家族は，私の話を聞いてくれる」などの家族から受容されている傾向にあると考えられる。

妥当性の検討

次に妥当性検討のため，家族満足度尺度得点とフェースシートの家族仲良度及び家族満足度とのピアソンの積率相関係数を算出した。すべての得点間において1%水準で有意な中程度の正の相関がみられた(表4)。この結果から，家族満足度尺度の妥当性はある程度確認された。

学年と性別による家族満足度得点の関連

次に学年と性別によって家族満足度尺度得点に差があるか検討するため2要因分散分析を行ったところ，学年の要因に有意差がみられた($F(1, 324)=23.02$, $p < .001$)(表4)。そこで，多重比較検定を行ったところ，3年生は5年生及び6年生に，4年生は6年生に，5年生は6年生にそれぞれ0.1%水準で家族満足度尺度得点が有意に高かった。また，性別の要因にも有意差がみられた($F(3, 324)=11.09$, $p < .001$)。女子の平均値は男子の平均値よりも0.1%水準で有意に高かった。学年と性別の交互作用は有意差がみられなかった($F(3, 324)=1.06$, *n.s.*)(表5)。

表4 家族満足度得点と仲良度・家族満足度との相関係数

	家族仲良度	家族満足度	家族満足度得点
家族仲良度		.69**	.65**
家族満足度			.69**
家族満足度得点			

** p <.01

表5 家族満足度質問紙に関する学年・性別の2要因分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
学　年	3305.27	3	1101.76	11.09	.00
性 別	2288.22	1	2288.22	23.02	.00
学年＊性別	316.43	3	105.48	1.06	.37
誤 差		324	99.40		

表6 性別と学年における2要因分散分析結果及び平均及び標準偏差

学年	男子			女子			学年主効果	性別主効果	交互作用
	平均	SD	N	平均	SD	N			
3年	69.91	12.47	33	73.09	8.25	43	3年>5年	女子>男子 ＊＊＊	n. s.
4年	66.73	10.45	63	72.6	8.89	52	3年>6年		
5年	66.11	10.04	28	70.11	8.86	38	4年>6年		
6年	58.43	9.96	35	67.00	10.83	40	5年>6年		
合計	65.45	11.34	159	70.88	9.45	173	＊＊＊		

*** p <.001

考　察

家族満足度尺度は，「家族満足度」，「家族共通行動」，「家族に関する自己開示」，「家族からの受容感」の4因子で構成され，α =.76～.88となり，尺度の信頼性が確認された。また，家族満足度尺

度得点と家族仲良度及び家族満足度との間に1%水準で有意な中程度の正の相関がみられたことから，家族満足度尺度の妥当性はある程度確認されたと考えられる。

学年と性別によって家族満足度得点に差があるかを検討したところ，学年と性別のいずれにおいても有意な得点差がみられ(表5)，女子の方が男子に比べて家族満足度得点が高いことが認められた。この結果から，学年を問わず女子の方が男子に比べて家庭で居心地よく過ごし，家族との情緒的なつながりが強いことが考えられる。多重比較検定の結果，学年間では3年生は5年生及び6年生より，4年生は6年生より，5年生は6年生より，家族満足度得点がそれぞれ有意に高かった。この結果から，学年が上がるにつれて家族満足度得点が下がる傾向があることが窺えた。これは，学年が上がるにつれて，人間関係の重点が家族関係から友人関係へと移行していることを示唆していると考えられる。

子どもが起こす学校での様々な不適応行動は，学校だけでなく家庭の問題に起因する場合もある。子どもの不適応行動が家庭に起因する場合は，学級担任等が初期の段階で把握することが難しく，問題が深刻化して始めてわかるという場合も少なくない。それは，子どもが家庭の内部事情を知られたくないという意識が働くからである。しかし，不適応行動を起こしている子どもへの対応においては，家庭と学校の連携が重要である。そこで，子どもが学級で楽しく過ごすためには，定期的に家族満足度尺度を実施し，子どもの実態を把握し，初期段階で子どもに寄り添った対応をすることが必要である。

引用文献

Olson D・Sprenkle DH，Russell CS (1979). *Circumplex model of marital and family system* (特): *cohesion and adaptability dimensions, family types, and clinical applications.* Fam Process 18，3 − 28.

国民生活白書—つながりが築く豊かな国民生活 (2007). 内閣府(編) 社団法人時事画報社

草田寿子・岡堂哲雄 (1993). 家族関係査定法 岡堂哲雄 (編) 心理査定学 垣内出版

佐々木保行 (1996). 父親の発達研究と家族システム 教育心理学年報 35，137 − 146.

西出隆紀 (1993). 家族アセスメントインベントリーの作成—家族システム機能の測定— 家族心理学研究，7(1)，53 − 65.

前原武子・金城育子 (2001). 小学生・中学生が認知する家族環境—その尺度構成 琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要，創刊号